てきた。日本だ！　日本へ帰れる。思わず涙がこぼれた。

『スターリン大元帥閣下萬歳！』命ぜられて大声で三唱した。

五月七日、舞鶴港上陸。日本の土を踏んだ実感をしみじみ味わった。生きて帰った。

五月十日、本籍地の船井郡殿田町の我が家に無事帰着することができた。

シベリアへ抑留

和歌山県　面家一博

昭和二十年四月一日松江市に集合、博多港より釜山港まで輸送船で、それからは鉄道でハルビンへ、そこの満州第八三七二部隊の高橋大佐の下に入隊する。軍事訓練も十分に受けられないままで、ソ連軍の侵攻で新京まで南下し終戦を迎えた。

終戦になるや、八路軍の暴動に対し銃を持って鎮圧に行く者もあったが、私は参加せずにいた。そのうちにソ連軍が侵入してきて小学校の校庭で武装解除になった。十月中旬ころに貨車に詰め込まれて北へ北へと進む。武装解除を受けた当時から二カ月間は、どのようなことになるかは分からないままで待機していたときに、大隊長は「我々は今はここにいるが、やがては祖国に無事帰れるから流言飛語に惑わされず静かに時を待つように」と度々訓示していたが、一人また一人と逃亡する者があった。その彼らに「先見の明」があったのかどうか、隊にいたら、やがては抑留の憂き目を見るであろうと言っていたが、我々のように満語も話せず地図に不案内な、内地より直接送られてきて間もない者には成り行きに任せるよりなかった。その我が小隊は二〇一名であった。

十数日かかって十一月の初めころにバイカル湖南岸の「ウランウデ」に到着し下車した。

収容所はあまり大きくない棟二棟で、狭いながらもそこで起居することになった。

二日目から宿舎を建て増しする工事に掛かる。山に

行き原木を切ってきて骨組を建て、壁は二重に板を張って、その間に「おがくず」や雑草、土などを詰めるのであるが、後で春になって詰め物に雪が混っていたので融けてすき間風が入ってきたものだ。新しい二棟が出来たのでゆっくり眠れると思ったが、やはり古い宿舎の方が寒さ凌ぎには勝れていたようです。

しかし、夜寝て悩まされたのは虱であった。肌着の縫い目にずらりと卵が並び、その間を親虱が我が物顔に走り回っているのです。寝付くころに這い出て来て噛まれて痒くなるのです。

次は作業のことですが、原木の伐採、レンガ造り、道路建設、機械の部品造りなどで、私は機械には経験があるので機械工場の方に行くことになり、自動車の部品やそのほかの部品造りであった。工場では「ノルマ」があり百パーセント達成はたやすいのであるが、地元の工員たちが嫌って困らせられたのです。余り「ノルマ」を上げると基準も上がって余分に働かねばならぬと言うのである。しかし私らは、冬は寒いので、早く「ノルマ」を済ませて火のそばで暖を取りたいのです。

「ノルマ」を百パーセント達成したその日は、パンの大きさも違っていました。

レンガ造りの組は、やはり体力の差で、地元の人たちに遅れをとっていたらしい。それで食事の方もパンの大きさが違って少し哀れで我ながら悲しい思いであった。

二度の寒さを経て、昭和二十二年七月ごろに「ダモイ」の時がきました。貨車に乗せられ、「ウラジオストック」で下車する。しかし私たちの隊は二百名でちょうど缶詰工場で使うには都合のよい人数であったようで、レーニ島という小さな島にある缶詰工場で四十日余り作業することになったのです。昼は作業、夜は民主教育を受けた。皆帰りたい一心で共鳴した振りをするのに苦労しました。反動の烙印を押され、残留させられてはたまらないからだ。

いよいよ「ダモイ」となり、「ウラジオストック」を経て「ナホトカ」より引揚船「信洋丸」に乗り込む。乗ってしまえばしめたもの、下ろしにも来ないであろ

う。船内は和やかなものだ、苦労が多かっただけに喜びも大きい。そして函館港に着いた。

全員上陸を許可されて二年半ぶりに日本の土を踏むことができました。モンペ姿の御婦人方の出迎えを受け、感激が込み上げてきた。

追憶

島根県　景山利造

私は大正十一年十月九日、島根県の山間部の農家で七人兄弟の五男として生をうけ、地元小学校を卒業後、直ちに青年学校へ入校した。

時あたかも支那事変が勃発し、特に軍事教練が厳しい時代でもあった。私の父もかつて日露戦争に従軍して外地の大連地区で参戦したことのある厳格な人であり、長兄は運送業など自営していたが、若くして病魔に侵され昇天した。二男、三男は中支に出征し、三男が早く戦死し、二男は「ノモンハン」の戦闘にも参戦し大変な苦戦したらしく、その後南方へ転属し、つづいて四男も朝鮮軍へ入隊した。当時、私どもの地区では、出征兵士の数ほど、国旗を掲揚するきまりがあり、庭先の国旗掲揚柱には三つの旗がひるがえり、三人の出征兵士を送り出していることが一目瞭然とし、誉れ高き出征軍人の家として表面的にはその栄誉をたたえられたが、父母は本心どんな気持ちでいただろうかと切なる思いがする。

昭和十六年十二月十日、ついに私も現役兵として西部第三部隊へ仮入隊して後、藤第六八六五部隊へ編入され、深夜、下関港経由の輸送船で釜山港に向かい、日本の地を後にする。釜山から列車輸送で山海関を通過し、支那の首都南京を通り、揚子江を船で上り、上流地の漢口に着く。そこから部隊の駐屯地まで約一週間、徒歩行軍でようやく目的地に着いた。

我々は入隊のため民家を改造した兵舎に入ることができたが、時期は昭和十八年一月中ごろであったと思う。

翌日から初年兵教育、訓練で鍛えられ、四月には一